

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第三十二主日B年

小西広志

2021年11月7日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は11月07日は年間第三十二主日ですが、今日の朗読の箇所をシノドス的教会のあり方と関連づけながら読んで、味わっていきましょう。

みことばをあじわう意義

最初に、なぜ2023年11月に開催されるシノドス『世界代表司教会議 第16回通常総会』に向けての歩みの中で、このように毎週、主日の朗読箇所をシノドス的な教会のあり方と関連づけながら読んでいこうとしているかについて皆さまと確認し合いたいです。

プロセスを大切に

今回のシノドス『世界代表司教会議 第16回通常総会』は教会が備えているシノドス的な特性、これをシノドス性と申しますが、それを深めるのが目的になっています。ですので、本会議を開催して何かを決めていくのが大切なのではなく、各教区ごとに、あるいは教会のそれぞれの団体ごとにシノドス的な教会のあり方へと向けて歩いていくことが大切になります。プロセスが大切になります。

霊性が問われている

こういった歩みのプロセスの中で、頼りになるのは神のみことばである聖書のことばです。なぜなら『神よあなたのことばはわたしの足のともしび わたしの道の光』と典礼聖歌で歌うように教会の歩みを支えてくださるのは神のみことばだからです。しかし、現実にはシノドス的な教会のあり方によって、みことばをどのように読み、味わったらよいのか、そのガイドラインのようなものは示されていません。ですから、わたしたちの教区では、毎週、毎週、主日の朗読箇所を読み、味わうという試みをしながら、シノドス的な教会の姿を皆さんで分かち合い、心に刻んでいきたいのです。本会議がおこなわれる2023年11月までおよそ2年ありますので、地道にわたしたちはみことばに取り組んでいきましょう。みことばに照らされた信者の生きる姿、これこそが霊性なのです。

やもめ

さて、今日、年間第三十二主日B年の三つの朗読箇所を「ことば」中心に味わっていきましょう。最初に味わいたいのは第一朗読と福音朗読に登場する“やもめ”です。

貧しく、弱い立場の存在

聖書の中には毎日の生活を一生懸命に送っている人々が登場します。そういった人々のなかで、やもめはもっとも立場の弱い存在でした。やもめとは寡婦のことですが、律法には「やもめ、孤児、他国からの寄留者」を守れとあります（出20章20—23節、申14章28—29節、24章17—22節）。いつの時代もやもめは貧しく弱い存在でした。そして、福音朗読の中に「やもめの家を食物にし」（マコ12章40節）とありますから、イエスさまの時代では律法学者たちは弱い立場にあるやもめを何らかの形で搾取していたのかもしれません。

貧しい人の様子

やもめの社会的な地位の低さについて、教皇さまは2018年11月11日の「お告げの祈り」の中で次のように説明しています。

彼女〔やもめ〕は、自分の権利を守ってくれる夫がないために、社会的に非常に低い立場に置かれており、良心のかけらもない金貸しのえじきに、いとも簡単になってしまいます。金貸しは支払いに応じるよう、弱者を追い回します。

律法学者たちの欺瞞

律法学者たちは人々から尊敬を得るために「見せかけの長い祈り」（40節）をしていたのでしょうか。彼らの欺瞞は宗教性を帯びていましたから、たちが悪いものです。神さまの掟を守る存在として律法学者たちは人々から尊敬され、敬意を受けていました。そういった自分たちの立場を守るために神さま自体を利用しているのです。彼らは優越感と虚栄心に満ちた態度でやもめのような貧しい人々を軽蔑していました。イエスさまは、こういった律法学者たちの宗教的な目的を満たすために貧しく弱い人々を抑圧するあり方を非難します。神さまのご意志をよく知っている宗教的指導者である律法学者たちがおこなう偽善は、神から「人一倍厳しい裁きを受ける」（40節）ことになるのです。

生活費

さて、次の「ことば」に移りましょう。福音朗読の最後に、「皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持っている物をすべて、生活費を全部入れたからである」（44節）とあります。“生活費”ということばに注目してください。

生涯を全部入れた

この「ことば」はギリシア語でビオスと言うそうです。「生活を送る上で必要な費用」という意味と「その人の人生、生涯」という二つの意味がこの「ことば」にはあるそうです。レプトン銅貨二枚を入れたやもめはすべてを与え尽くしたのです。自分の立場も哀しみもつらさも、すべて神さまに与え尽くしたのです。

終末的な生き方

ここに、やもめの終末的な生き方が見えてきます。今、この瞬間をすべて神さまに頼って生きていくそんな生き方です。終末というのは、遠くに生じる終わりのことだけではありません。むしろ終末は、いつも今、この時に生じるのです。

献げる

もう一つ、今日の朗読箇所から注目したいのは第二朗読に登場する“献げる”です。

信頼し、献げる

第一朗読ではエリヤ通して語られる「神のことば」に信頼したやもめの姿に焦点が当たります。福音朗読では、今度は「神のことば」(律法)を知りながらも偽善を働く律法学者たちが非難された後で、持っているわずかなものをすべて献げるやもめが姿が印象的です。今、この時に持っているものすべて、いのちのすべてを献げるやもめの姿は、第二朗読の大祭司キリストと結びついています。こうしてやもめと大祭司キリストに共通なものは神さまにすべてを信頼して生きる終末的な態度であり、同時に自分自身を献げることで、神さまに自分を明け渡す行為なのです。

まとめ

教会はやもめのような弱く、貧しい人々が集うところです。貧しさはお金の多い少ないだけでは計れません。ましてや現代社会では貧しさは複雑な姿でわたしたちの生活に入り込みます。わたしたちは貧しい者なのです。明日をも知らぬ不安定さの中で生きるわたしたち貧しい者にとって、神さまのことばは「足のともしび、道の光」です。シノドスの教会は、いつも神さまのことばに頼りつつ歩んでいきます。そして、貧しい者はすべてを献げて生きていきます。人生の一コマ一コマが惜しみなくすべてを神さまへ、隣人へ、家族へと献げる時なのです。その点でシノドスの教会は終末的な切迫感を背負った教会となると思います。「わたしは大丈夫」と胸を張って威張れる人は誰一人いません。神さまに頼りながら人生を生きていくとき、わたしたちの中に福音が実現していくのです。

それでは、また来週。